1）隊員同士の勉強の機会の提供

セネガルでは、隊員自主企画により 4 つの分科会（勉強会：村落会、子供会、医療会、農業会）が組織され、隊員活動に有益な情報の提供、享受、研究が行われている。これらの活動は非常に活発で、事務所としても積極的に支援している。例えば、子供会にはセネガル人のスタッフ（高級クラーク）を雇用し視察先やヒアリング先のアレンジ、医療会ではプロ技の訪問アレンジなどにより専門的な助言を得ている。また、各分科会での勉強会を終了時には報告書が提出される。分科会以外にも、4 つの委員会（幹事会、交通安全委員会、隊員連絡所係、機関誌「バオバブ」編集委員会）が存在し、隊員同士での活動の円滑な推進を図っている。

2）報告書へのコメント

隊員の報告書は、まずシニア隊員が目を通した後、調整員が要約作成、所長、次長が必ず目を通し、そして、地域開発の視点からコメントをするようにしている。これは、隊員の励みになるようである。また事務所としても個々の隊員の状況をできるだけ把握するように努める努力の一貫となっている。

3）事務所と隊員のコミュニケーション

事務所では、できるだけ事務所の考え方・姿勢を協力隊員に伝え、また同時に隊員からの意見を聴取するよう努力している。例えば、隊員活動報告会（赴任３ヶ月時、１年、帰国時に実施）を定期的に実施し、隊員が発言する機会を作っており、その場へできるだけ所長、次長が出席し、隊員の報告を聞き、必要があれば、コメントする。また、ホームページや紙面（「サヘルの風」（セネガル事務所２ヶ月に一回発行）」等）によって、隊員にできる限りの情報提供を行うよう心がけ、同時に隊員から情報提供も受けている。隊員から質問、提言があった場合も、誠意をもって回答するようにしている。

4）隊員情報の蓄積

隊員の報告書は貴重な情報源である。現在、隊員有志および調整員によって、そのデータベース化を行っているところである。それによりキーワード、職種等による隊員報告書のピックアップが可能となる。現在データ作成中である。

＜隊員の評価について＞

・ 11 月 19～20 日にパリで開催された調整員会議においても隊員の評価について議論になった。セネガルでは、ファティック州の隊員配属先の農村開発局ファティック州事務所長の強い要請により、試行的に隊員評価を実施している。同所長とシニア隊員による、アンケート票を用いた「住民による評価」[1]である。

---

[1] 評価の目的は、・隊員活動パートナーの JOCV 理解度を測る、・活動受益者に対する隊員活動の効果を測る、・JOCV の長所と短所を見極める、・隊員と配属先の協力のあり方を位置づける、・隊員活動評価システムを確立する、である。評価の手順は、1)協力隊員及び隊員受入機関に対して評価活動について説明する、2)隊員受入機関及び隊員の活動対象者に対してアンケート調査を行う、3）各郡において寸楽議会と村人の参加の下、アンケート結果をもとに意見交換会を行う。

＜グループ的派遣の変則案＞

・現在、検討中のグループ的派遣の変則案がある。日本の無償で建設した「ティエス病院」のフォローアップとして、複数の看護婦隊員と年3か月程度の婦長クラスのシニアボランティアを組み合わせるという形態である。

・チーム派遣の予算について。チーム派遣やグループ派遣にまとめて予算がつくという現在の形態よりも、その予算総額を事務所の裁量で、セネガル国全体の協力隊活動に戦略的かつ公正に分配できるようになればよいと考えている。

＜セネガルの特殊性＞

・セネガルにおいては、ほとんどの隊員が何らかの形で「村落開発」に従事しているといえ、今後「村落開発普及員」一本で要請を出してもいいくらいである。一般に、農業隊員、看護婦隊員など技術移転に忙殺されて、目の前の住民の真のニーズを見落としがちである。農業隊員であっても運営指導の知識・ノウハウが必要である。一方、村落開発普及隊員は、基本的な農業の知識は身につけてきて欲しい。それぞれは、両方の視点と知識を持っていることが望ましい。そういう基本的な研修を本邦研修で付加させられないか。

＜他スキームとの連携＞

・案件形成という意味では、協力隊活動は他スキームに大きく貢献している。セネガルで現在実施されている「マングローブの開発調査」は 20 年に及ぶ協力隊員の活動の蓄積の上に形成された。また、現在派遣中の協力隊員も関わっている。さらに、これから始まる「子供ための開発調査」も保健・教育・地域福祉の分野での協力隊活動の実績に大いに関係している。

・また、現在実施されているプロ技「地域総合植林開発プロジェクト（PRODEFI)」は、グディリ医療プロジェクトの OB 天谷隊員が参加しており、チーム派遣プロジェクトの経験を生かしながら、住民参加型・ニーズ密着型の植林+生計向上のプロジェクトを展開している。

・しかし、これらの開発調査や無償に、協力隊員を取り込むのは賛成しない。一つには R/D の段階から協力隊が位置づけるのは不可抗力の多い協力隊事業において実質的に危険であると考えるからである。また、協力隊の理念からもコンサルタントの下に手足のように取り込まれるのは相容れないと考える。コンサルタントと協力隊が現場で出会い、お互いに情報を共有化し、立場の違いを認識しつつ活動できる場合のみ、実現されるべきである。

＜国際協力人材育成の観点＞

・自分の知る限りでは、隊員 OB/OG60 名のうち 10 名以上が留学または国際開発分野に進学している。

・個人を伸ばすという点で、まず人材育成の効果は大きい。また、前述したように隊員 OB/OG が他スキームに専門家として関わったり、コンサルタントと関わったりしている事例は枚挙にいとまがない。

議事録

主な課題	JOCV 受入機関による JOCV 評価
訪問先名（場所）	公務雇用省
日時	2001 年 11 月 29 日（木）　10:00-11:00
面会者	公務雇用省社会協力局長
調査団出席者	宮原職員、平野調整員、Doucoure 現地事務所高級クラーク、駒澤（記録）

協議内容

主な聞き取り内容は、以下のとおり。

局長：

・私自身はこの任に 7 年前から就いており、JOCV の活動について非常に感謝している。

・特に JOCV は、開発効果だけでなく、地域住民と一緒に活動し、住民組織を形成するという過程に大きな意義がある。また、地域住民が日本のことを知り、日セの交流にも大きく貢献している。

・ JOCV に関する課題としては、適切な隊員の選択、十分な研修、動機に基づいた計画策定（案件形成）が挙げられる。

○研修について

・各援助機関のボランティアは、異なるアプローチをとっているが、相互に補完できると部分があると思う。例えば、JOCV はピースコーに比べて、研修の質の向上も課題である。ピースコーは 1960 年からボランティアを派遣し 63 年から研修センターでの研修（本国での現地語習得のあと、現地研修 3 か月、ホームスティあり）を開始しており、研修に関する長い経験と実績がある。JICA も同センターの研修内容をもっと参考にしたらどうか？（実際は 2 年前から同センターに研修を委託し、同様の研修を行っている）

・現地研修の最後に、C／P が研修に 2～3 日合流して、隊員と C／P が一緒に活動計画を策定するというのはどうか。

・ JOCV は他ボランティアに比べて、派遣期間が短いのも問題である。

○案件形成について

・ JOCV は ODA として日本の国民の税金によって実施されているのだから、投入に見合った効率的な活動を行うべきである。また、そのためにはセネガル国民のニーズを開拓し、案件形成をしていかなければならないと考える。

・つい最近、JICA セネガル事務所と協議をし、今後はブルーシートから要請案件を選択する作業は当局と JICA 事務所と共同で行うよう話が進んでいる。

・今後、セ日両政府間で、年 3 回ほど定期的な会合を持って、セネガル政府としてもニーズを提示し、さらに実施体制の改善のために協議していきたい。

○広報活動

・一般的に住民は情報 JOCV のことについて理解していない（物質を提供するのではなく技術を移転するという目的等)。もっと住民と情報を共有できるような体制ができないか。

○評価システム

・前述のような、案件形成、研修、十分な情報の共有ができて始めて、評価システムができる。

○チーム派遣について

・ティエスの緑の推進プロジェクトは貴重な経験で、自立発展しており、良い効果も上がっている。C／P の研修員受入もよい成果を上げている。

○セネガル政府の協力

・セ政府としては、これまでとおり隊員の住宅確保に全面的に協力していく。

○ JOCV の印象について

・まじめで、がまん強く、礼儀正しく、かつ異文化を受け入れる素養がある。

議事録

主な課題	これからのJOCV派遣戦略
訪問先名（場所）	在外事務所
日時	2001年11月29日（金）　14:00-15:00
面会者	井上専門家（内務省政策アドバイザー）
調査団出席者	駒澤（記録）

協議内容

井上専門家はセネガル緑の推進協力プロジェクトの第一次隊 OB であり、現在のセネガル内務省の政策アドバイザーとして派遣されている。同専門家の TOR にセネガルにおける JOCV 戦略を策定することも入っていることから、その点を中心にお話をうかがった。主な聞き取り内容は、以下のとおり。

(1) 主なTOR

同専門家の主な TOR は、①セネガルにおける村落開発の援助方針を策定する、②A1フォームの改訂と活用の検討、③JOCV の調整・支援である。

(2) JOCV 全般について

・これまでJOCV事業はボランティアとしてあまり成果や評価について問題にされなかったが、これからはしっかりした計画を立てなければ、その評価が求められることになる。協力隊の活動効果とは、協力隊自身と活動先がお互い「幸福」であるかどうかということであろう。

・最近の隊員は、配属先からの業務の指示を待つという傾向が強い。従って、配属先が無関心だと自分のする仕事がないと感じる。

・JOCV の課題

配属先が JOCV 事業のことをよく知らないということ、配属先が隊員をどう扱っていいか分からないという点であろう。協力隊活動をよく知ってもらい、よくするために「第三者評価」（村人、派遣先による）が効果的であろう。隊員からよく聞く話としては「配属先が無関心」「援助漬けで、お金ばかり欲しがる」という指摘があり、その解消に効果がある。

(3) セネガル事務所の試み

・同事務所は、JOCV 事業をセネガル側に理解してもらうために、JICA 事業の広報活動に力を入れている。一つには今年から始めた「JICA/JOCV セミナー」がある。2001 年2月にファティック州（現在、1名のシニアの下、19 名の隊員を派遣中）において初のセミナーを開催。また2001年11月にはカオラック州（同月新シニアが配属された）において第二回目を開催した。

・このセミナーを全国で開催していく予定。（北部地域にもう一名のシニア隊員を配置予定）。同セミナーでは、もっとこのようなセミナーを開催して欲しい、協力隊の職種を増やして欲しい、

延長＋引き継ぎの問題（語学研修期間は空白になる、引き継ぎのための延長を認めて欲しい）などの要望がセネガル側配属先・受入機関から出た。

・要請開拓について。Ａ１フォーム（要請書）の改訂。計画書の添付を検討中。

・配属先と月１回調整会議を行うよう奨励している。(県から郡レベルまで指導している)

(4) チーム派遣について

・ポジティブな面としては、アピール力がある点、インパクトが見えやすい点で、総じて裨益国側の好感度が高い。

・派遣前に本人への十分な説明が必要。

・活動過程で隊員自身が得たものが大きい。

(5) 専門家としてのこれからの業務

・タタギンヌにおける計画グループ的派遣の計画作りの支援。

・村人の研修のための研修センターを作り研修していく（長官の意向）

・協力隊事業の体制整備。特に、要請開拓の方法：日本側とセネガルから出た要請書を一括して集めて、公務雇用労働省の協力局長と２者による検討会を開き要請内容を吟味する機会をもちたい。

緑の推進協力プロジェクト関連

議事録

主な課題	森林局の政策と JOCV 評価
訪問先名（場所）	森林局
日時	2001 年 11 月 20 日（火）　9:00-9:30
面会者	森林局長、森林次長、造林保護部長、砂丘植林プロジェクトリーダー
調査団出席者	藤村森林局個別専門家、宮原職員、平野所員、Doucoure 現地事務所高級クラーク、駒澤（記録）

協議内容

主な聞き取り内容は、以下のとおり。

局長：

・ JOCV の活動によって国民の植林に対する意識は高まった。

・ JOCV のプロジェクトによる教訓を活かして、政策作りに反映している。

・特に JOCV は草の根レベルで活動をしており、直接住民に対して啓発できるという点で重要である。また地域における植林活動を通じて地域開発にも貢献した。

・できれば、今後も同様なプロジェクトを展開していただきたい。

（宮原：現在、54 名の JOCV が活動している）

・造林保護部長：これまでもプロ技と他スキームとの連携をいろいろ提案してきたが、もし JOCV 側に興味があるならば、今後他スキームとの連携も考えられる。例えば、無償と JOCV、プロ技と JOCV など、特に施設を整備した後の普及活動に JOCV が活躍できる場は多いと思うので、うまく組み合わせていければといいと思う。

・砂丘植林プロジェクトリーダー：現在、JICA の砂丘植林プロジェクトを担当している。植林を行うだけでなく、地域の農民は野菜栽培など商品化作物の生産に対する期待が高いので、そこにも JOCV の活動の余地はある。

・次長：これまで JOCV と一緒になっていろいろな活動を行ってきて、様々なインパクトを得ている。ティエスのプロジェクトでは、公営苗畑が整備され、在来種の樹種を植え、今も残っている。これらの活動を住民を巻き込んで行ったので、住民の認識も高い。
地域振興という意味でも、JOCV の活動は非常に意義がある。

・砂丘植林プロジェクトリーダー：PROVERS では年間 200 万本の苗木生産量が増加し、セネガル全体で 2000 万本増加し、現在もその生産量は維持しているが、現在では年間の必要量がさら

に増え、1億本が必要である。

・造林保護部長：プロジェクト形成について。現在までに苗畑造成の無償を第3次まで終了した。現在、第4次を申請中である。この第4次がもし実施されることになったら、JOCV にも参加してもらいたい。

VISIT TO THE KEUR MOUSSA SOUS PR FET（クールムッサ郡長）

On November the 26th 2001, at 10 o clock, the PROVERS evaluation mission has met Mr Amadou Bamba SYLLA, Keur Moussa s *sous pr fet,* with the participation of the Center for Rural Developpement (CERP) team.

Mrs Miyahara (chief of mission) began by introducing the members of the team, before explaining the goal of the mission, which consisted in an evaluation of the PROVERS project and its sustainability in the areas of Keur Moussa and Thi naba. She also thanked the *sous pr fet* for the warm welcome he had given to the mission team.

After her, Mr Di m , Forestry Agent and a member of the CERP in Keur Moussa, also responsible for the nursery and in charge of the assistance to the Japanese volunteers, underlined the importance of the PROVERS intervention in his *arrondissement.*

According to Mr Dioum, who heads the CERP, PROVERS has helped solving a number of highly important problems that were obstacles to the development. He pointed out, among other things, the problem of the access to water, in particular in Ngomene.

Sous prefet Sylla greeted the mission team, and insisted on the excellent quality of the relationship between the Japanese government and its Senegalese counterpart;
He also said how much he appreciated the intervention of PROVERS, the results of which are obvious in the *arrondissement.*

But *sous prefet* Sylla also deplored the lack of collaboration between the Japanese Volunteers and the Administrative services. This is why he particularly enjoyed the mission s courtesy visit.

To conclude, *sous prefet* Sylla thanked the Japanese government for its help as to the development of Senegal.

VISIT TO THE THIØS FORESTRY AGENCY (EAUX ET FOR TS)（水利局員）

In the afternoon of November the 26th 2001, the PROVERS evaluation mission has met Mr Cl ment Di dhiou, Thi s forestry agent, with the participation of Mr Mansour Diop.

Mrs Miyahara (chief of mission) began by introducing the members of the team, before explaining the goal of the mission, which consisted in an evaluation of the PROVERS project and its sustainability in the areas of Keur Moussa and Thi naba. She also thanked the Forestry Agency s team for the warm welcome they had given to the mission team.

In their speeches, Mr Di dhiou and Mr Diop have both underlined PROVERS impacts on the production of plants in the Diakhao (Thi s), Thi naba and Keur Moussa nurseries.

This contributed to make of Thi s the number one region as regards the production of plants every year since 1986. The Japanese engineers also taught the population how to save water and to use fewer workforces to produce plants.

In the Keur Moussa *arrondissement*, the better environmental conditions allowed the

production of fruit trees.

Acording to Mr Mansour Diop and to Mr Di dhiou, the downside of the PROVERS was the insufficient communication between the volunteers and the Administrative services. They also underlined the problem of the coordination of the volunteers work, though this situation improved after the arrival of a Japanese expert.

To conclude, Mr Di dhiou thanked the Japanese government for its support to the actions in the field of development that were initiated in the region.

VISIT TO THE THIENABA SOUS PREFET（ティエナバ郡長）

On November the 27th 2001, the PROVERS evaluation mission has met Mr Alioune DIOP, Thi naba *sous pr fet,* with the participation of the CERP team.

Mrs Miyahara (chief of mission) began by introducing the members of the team, before explaining the goal of the mission, which consisted in an evaluation of the PROVERS project and its sustainability in the areas of Keur Moussa and Thi naba. She also thanked the *sous pr fet* for the warm welcome he had given to the mission team.

Sous pr fet DIOP greeted the mission team. He also said how much he appreciated the quality of intervention of PROVERS, and that he was sincerely happy to welcome a Japanese delegation in his *arrondissement.*

Sous pr fet DIOP has expressed his contentment as regards the collaboration with the Japanese volunteers, and said he considered PROVERS a success for the *arrondissement.*

Sous pr fet DIOP insisted on the excellent quality of the relationship between the Japanese and Senegalese governments.

Eventually, he wished the best of luck to the evaluation team and hoped their analysis of PROVERS would identify positive results.

グディリ医療プロジェクト関連

議事録

主な課題	保健予防省の政策と JOCV 評価
訪問先名（場所）	保健予防省
日時	2001 年 11 月 29 日（木）　9:00-9:30
面会者	保健局長
調査団出席者	宮原職員、平野調整員、Doucoure 現地事務所高級クラーク、駒澤（記録）

協議内容

主な聞き取り内容は、以下のとおり。

局長：

・私自身はこの任に 4 か月前に就任したばかりであるが、グディリ医療センターの元所長・サホ医師とは面識があり、グディリ医療プロジェクトについては聞いているところである。

・技術移転について。セネガルの公務員人事は通常 3 年で異動し、医療機関のスタッフも同様であり、ドナーによる技術移転を受けてもすぐ異動してしまい、技術移転が定着しないという問題を抱えている。最低 5 年にすべきであると考える。

・自立発展について。助産婦の研修はいまも継続して行っている。機材の維持管理については、前述の異動の問題もあり、継続が難しい状況である。

・ JICA による新しいプロ技「保健人材開発促進プロジェクト」が 11 月からスタートした。セネガルでは「アクションプラン 2000-2003」を策定し、セクターごとに実施計画を作成しているが、保健セクターの人材開発もその 1 つのテーマで、年間予算も確保している。JOCV のグディリ医療プロジェクトの経験を生かしていきたい。そのために、先週火曜日からセネガル側と JICA セネガル事務所との間で、協議を始めたところである。

議事録

主な課題	表敬
訪問先名（場所）	タンバクンダ州政府
日時	2001 年 11 月 21 日（水）　12:30-13:00
面会者	タンバクンダ州行政担当副知事、同開発担当副知事
調査団出席者	宮原職員、阪口企画調査員、大出シニア隊員、駒澤（記録）、GERAD スタッフ計 4 名

協議内容

宮原職員が今回の評価調査に関する概要説明を行った後、グディリー医療プロジェクトに関する感想などを伺った。主な聞き取り内容は、以下のとおり。

行政担当副知事：

・タンバクンダ州はたいへん貧しい州であり、多くの問題を抱えている。そんな中で JOCV のプロジェクトが初めて実施されたことに大変感謝している。同プロジェクトは、草の根レベルで住民と直接接し、住民の生活を変化させた。

・しかし、未だにグディリ医療センターは問題があり、プロジェクトのフォローアップを望む。また、スタッフや地域住民の訓練・研修が十分でないので、その面の支援も望んでいる。

・最近、他の JICA のプロジェクト調査（多分、開発調査のこと）の調査団が訪れた。JOCV のプロジェクトの経験を新しいプロジェクトにも生かして欲しい。

議事録

主な課題	表敬
訪問先名（場所）	タンバクンダ州議会事務所
日時	2001 年 11 月 21 日（水）　15:00-16:00
面会者	タンバクンダ州議会主席副議長、事務局長
調査団出席者	宮原職員、阪口企画調査員、大出シニア隊員、駒澤（記録）、GERAD スタッフ計 4 名

協議内容

宮原職員が今回の評価調査に関する概要説明を行った後、グディリ医療プロジェクトに関する感想などを伺った。主な聞き取り内容は、以下のとおり。

タンバクンダ州議会主席副議長：

・同プロジェクトは、グディリの生活環境の向上に大きく貢献しており、感謝している。住民に対して直接活動していたことは意義深い。

・グディリ医療圏は大変広いが、十分な病院はなく、重篤な患者はタンバクンダ州立病院までいかなければならない。

・プロジェクトで整備されたグディリ医療センターの手術室も、現在ではメンテナンスが難しく、資材も不足している。これらの技術的支援ための要員が必要である。

事務局長：

・当州議会は、1996 年から創設され、地元から選出された 42 の代表（任期 5 年）からなり、中央政府から 2 人（行政管理、技術担当）の行政官が派遣されている。中央政府から予算交付がある。

・当州議会には 9 つの担当セクション（保健、教育、文化、計画、都市計画、環境、土地、スポーツ、社会活動）がある。

・州における保健関係予算は、ここからとタンバクンダ州立病院からの 2 つの流れがある。ここでは州立病院とグディリ医療センターを支援している。予算（燃料代、電気等の維持管理費、人件費）と資材の両面を供給している。またグディリ医療センターでは 5 人のスタッフを雇用している。（年間？）予算額は 700 万 CFA である。

MEETING WITH THE SENIOR CONSULTANT OF THE REGION OF TAMBACOUNDA

（ダンバクンダ州医療事務所）

The mission team paid a visit to the Senior Consultant of the Region of Tambacounda on Nov. 22nd , 2001, at 9AM

Attended to the meeting :

Dr Lamine DIAWARA, Senior Consultant of the Region of Tambacounda
Dr Bawe Kossi Naraf i, Direstor of the Health Care Centers of TOGO
Mrs Chie MIYAHARA, Chief of Mission
Mrs KOMASAWA Makiko°; Consultant
Mrs Rie ODE, JOCV coordinator Regions of Kaolack and Tambacounda°
Mrs Kayo, JICA
Mrs Aminata NIANG, GERAD°;
Mr Amadou DIOP, GERAD°;
Mr Ndary TOURE, GERAD°;
Mrs Cousson TRAORE, GERAD.

Mrs Miyahara, Chief of mission, presented the goal of the evaluation mission, the members of the team, and the schedule of the mission.

The Senior Consultant, in the name of the population and of the medical staff, thanked the JICA for the Medical Project of Goudiry. He then stated that he had only been in charge for the past 5 months. Nevertheless, he knows about the project and has had the opportunity to meet Japanese volunteers several times, as he was the coordinator of the campaign against Onchocercosis in the region of Tambaounda.

He thinks that the medical project of Goudiry was really beneficial for the population of the distrit of Goudiry. He also underlined the fact that the Goudiry Health Center was one of the very few, if not the only, Health Center in Senegal that disposes of a maintenance technician. He has been hired by the health committee. The Senior onsultant thinks that this decision is due to the beneficial influence of the Japanese Volunteers, who taught them to take care of the equipment and fix it. This is, according to him, a transfer of knowledge, and a transfer of a good habit.

Answering the questions of the mission team, the Senior Consultant has explained how the health care system of the Tambacounda region was organized.

He also underlined that the region of Tambaounda was the largest and the poorest region of Senegal. The morbidity rate is very high and it is necessary to develop health programs to improve the population s acess to basic healthcare. In the framework of the health prject FAD 1, the Senegalese government

financed (through an African Development Bank loan) the buying of one fridge and one motorcycle to each of the 7 health posts of the distrit of Goudiry.

The Chief of mission thanked the Senior Consultant for his reeption and for his explanations.

MEETING WITH THE SOUS PREFET OF THE *ARRONDISSEMENT* OF GOUDIRY
(グディリ郡長)

The mission team paid a visit to the Sous-Pr fet of the Arrondissement of Goudiry on Nov. 23rd 2001 at 12h30.

Attended to the meeting°:

Mr Mamadou DIATTA, Sous-Pr fet of the Arrondissement of Goudiry
Mr Aliou AIDARA, Sous-Pr fet s deputy
Mr Sindiang Kane SADIO, Chief of the Center for Rural Expansion (CERP) of the Arrondissement of Goudiry
Mrs Chie MIYAHARA, Chief of Mission
Mrs KOMASAWA Makiko°; Consultant
Mrs Rie ODE, , JOCV coordinator Regions of Kaolack and Tambacounda°;
Mrs Kayo, JICA
Mrs Aminata NIANG, GERAD°;
Mr Amadou DIOP, GERAD°;
Mr Ndary TOURE, GERAD°;
Mrs Cousson TRAORE, GERAD.

Mrs Miyahara, Chief of mission, presented the goal of the evaluation mission, the members of the team, and the schedule of the mission.

The Sous-Pr fet has expressed his joyfulness to receive the evaluation mission of the Goudiry Medical project. He said that the volunteers were appreciated by the Goudiry population. He stated that neither the medical staff nor the population would ever forget the Japanese cooperation, which allowed them to considerably improve their access to cares and the quality of their living conditions. He added that the population often asks him :

When will the japanese volunteers will come back to Goudiry ?

Chief of mission Miyahara underlined that the goal of the mission was first and foremost to evaluate the medical project, in order to measure its impacts and to learn precious lessons for the future. As regards the setting up of a new project, she cannot promess anything like this for now.

INTERVIEW WITH THE SENIOR CONSULTANT OF THE GOUDIRY MEDICAL DISTRICT
(グディリ医療センター)

Senior Consultant is the appropriate term for Chief Doctor .

The mission team met the Chief Doctor of the Goudiry District, Dr Fanding Badji on Nov. 22nd, 2001. Mrs Miyahara introduced the members and the goal of the mission. Mrs Komasawa asked for precise information about the organisation of the health system in the sanitary district, as well as on the classification of the personnel.

The Chief Doctor explained that the Goudiry District, as for each and every sanitary district in Senegal, is composed of some staff members who are appointed by the State, and of some community personnel who are recruited by the Conseil R gional and the health committee.

The staff members appointed by the State are the Chief Doctor, the state-registered nurses, the dentist, the mid wives, the laboratory technicians, and the anesthetist. This is not enough staff members, so it is backed by the community personnel (non-registered nurses, mid-wives, ticket sellers...)

The Chief Doctor thinks there are 12 staff members who were recruited by the State, 5 community agents recruited by the Conseil R gional, and 17 community agents recruited by the health committee. He asks for confirmation.

The various departments are : EPV service, sorting department, hygiene department, analysis laboratory, management department, audiovisual department and maintenance.
Mrs Sakaguchi asked why the staff members seemed more dynamic and why there seemed to be a wider range of services available.

The Chief Doctor thinks that it is due to the fact that the staff members are efficient and try to meet the goals set by the government, which are about improving the sanitary cover.
Mrs Komasawa asked for the most recent results as concerns mortality, mortality rates and the rate of visit frequency, in comparison with the objectives set by the previous Chief Doctor.

Chief Doctor Badji preferd to talk about his own objectives instead of his predecessor s. He says he has 4 main goals :

To make sure the Sanitary District works and to improve the sanitary coverage.

2) To improve the care for mothers and children. This would imply prenatal consultations, and sensitization as regards assisted childbirth —only 40% of women benefit from an assisted childbirth.

The Chief Doctor underlines the fact that he elaborated a program of sensitisation of husbands, wifes and NGOs. He thinks that in order ro reduce mother s mortality rate, it would be necessary to diagnose risky pregnancy as early as possible, to do the necessary surgical interventions on time. But the main problem remains that of accessibility to the health centers for women who live far away from them.

Mrs Komasawa wanted to know what were the solutions the Chief Doctor had thought of to solve the problem of accessibility.

He replied that more ambulances are needed, and also more telephones in every health posts to allow the nurse to inform the health center on time, so that women can be transported in good conditions.

3) To imrpove the vaccination coverage in the framework of the EVP. But the problem is that they do not have the right syringes. There is no problem as regards the vaccins, which are delivered by the State.

Mrs Komasawa wanted to know about the volunteers action as regards the pupils medical visit in schools. The Chief Doctor did not know about this activity.

4) But the fourth objective he has set is to improve the dental care of the Goudiry High School pupils.

Answering a question, he says the mothers mortality rate is of 750 casualties for 100 000 births. In comparison, it is 510 to 100 000 in the whole of Senegal. In the Kolda region, it is worse —1000 to 100 000. He also underlines the fact that the Goudiry Sanitary District s budget is too small —20 million CFA a year, when other districts have 40 million CFA a year.

The Conseil R gional is in charge of the District s budget, the funds being transfered from the State are used for the functionning of the health structures. The medical staff s requests are transmitted to the Chief Doctor quarterly, and in case of emergency. He points out that the Japanese volunteers were appreciazted by the population. They inculcated to the medical staff the notions of hard work and discipline.